

読書感想文
コンクール
中学校の部
最優秀賞

「人と関わるその先に」

佐々木 暁 美 さん
(志津川中学校3年)



「死んだらどうなるのだろうか？」
少年たちはこの疑問を持ち、「死んだ人を見てみたい」という好奇心を抱くところからこの物語は始まった。主人公である「ぼく」こと木山と、その友達の山下、河辺の三人は独り暮らしの老人の様子を観察し始める。
その老人は七月だというのにコタツに入り、ゴミの収集日にきちんとゴミを出さない、庭は草で荒れ放題、家の外に出るのはコンビニに食べ物を買う時だけだ。そんな生ける屍のような暮らしをしていた老人が、目を追うごとに元氣になっていったのだ。三人の少年たちは、年寄りの死を見たくて人の家を覗く悪劣キだったが、老人にとっては誰かと関わりを持つことになり、それが活力になっていったのだらう。

もし、自分があの老人のように、誰とも関わりのない生活をしていたらどうだろうと考えた。来る日も来る日も、話す相手もない暮らし。自分のことを心配したり、喜んでくれたり叱ってくれたりする人が誰一人としていない暮らし。そう考えると、あの老人の暮らしの変化を想像することができた。きっと何も楽しいと感じることもなく、生きる喜びなど感じることはないだろう。だから、誰かと関わりを持つことは、たとえそれが自分の死を期待している子どもであっても、老人にとつて久しぶりに面白いことであつたに違いない。
最初のころは、老人の死を見てみたいという好奇心から観察を始めた少年たちだったが、いつしかおじいさんとの間に不思議な関係が生まれていった。荒れ放題だった庭を、憎まれ口を叩きながらもきれいにし、コスモスを育てるまでに変わつたのだ。その間におじいさんは、辛い戦争の話、奥さんのこと、北海道に住んでいたこと、花火職人だったことなど、自分の過去のことを話してくれるようになったのだ。そして打ち上げ花火を見せられるなど、いつの間にか彼らの間には友情めいたものが生まれていった。けれど、皮肉なことに、最初の目標だった人の「死」に三人は直面することになる。
私は人間の死について、あの東日本大震災以来考えることをしないうようになっていた。それは、心のどこかで死は不吉、そして残酷なものだと感じてしまひ、考えたくなかつたからだらう。だから、少年たちとおじいさんとの関係が変化していくことが、特におじいさんがどんな人間らしさを取り戻して元氣になつて

いっただろ。だから、誰かと関わりを持つことは、たとえそれが自分の死を期待している子どもであっても、老人にとつて久しぶりに面白いことであつたに違いない。
最初のころは、老人の死を見てみたいという好奇心から観察を始めた少年たちだったが、いつしかおじいさんとの間に不思議な関係が生まれていった。荒れ放題だった庭を、憎まれ口を叩きながらもきれいにし、コスモスを育てるまでに変わつたのだ。その間におじいさんは、辛い戦争の話、奥さんのこと、北海道に住んでいたこと、花火職人だったことなど、自分の過去のことを話してくれるようになったのだ。そして打ち上げ花火を見せられるなど、いつの間にか彼らの間には友情めいたものが生まれていった。けれど、皮肉なことに、最初の目標だった人の「死」に三人は直面することになる。
私は人間の死について、あの東日本大震災以来考えることをしないうようになっていた。それは、心のどこかで死は不吉、そして残酷なものだと感じてしまひ、考えたくなかつたからだらう。だから、少年たちとおじいさんとの関係が変化していくことが、特におじいさんがどんな人間らしさを取り戻して元氣になつて

させるものだ」と詠み終えて思つた。
死とは他者との関わりがなくなることで、今まで話していた人たちと会えなくなり、話せなくなるのだ。そしてその存在がなくなると、喜びも悲しみも生まれないだらうし、生きる気力もなくなくなるだらう。
生きることは、人との関わりの中で存在する喜びや悲しみを感じていくことなのではないかと思うようになった。読み終えてからしばらくは苦しいような重たいような気持ちになつたが、やがてそれはしだいにすがすがしい気持ちに変わつていった。今生きていること、存在していることを大切にしたいと思うようになったからだ。
この本は、私に今を大切にすること、一緒に生きる仲間や家族に感謝すること、そして人と関わりを持つことが大切であることを教えてくれた。

書名：夏の庭
The Friend
著者名：湯木香樹実
出版社名：新潮文庫

読書感想文
コンクール
小学校高学年の部
最優秀賞

「二番目の悪者」を読んで

及川 千 歳 さん
(名足小学校6年)



うわさとは、おそろしいものです。たった一人がついたうそが、世の中を変えてしまふこともあるのです。私は、この本を読んだことによつて、うそやうわさの怖さを深く知ることができました。
この本の中に出てくる国では、王様が年老いていたため、次の王様を国民で決めることになりました。候補者は、一人いました。それは、みんなに親切で働き者の、銀のたてがみのライオンです。この銀の動物達が認めています。その動物達は、銀のライオンに直接親切にもらった者達でした。私もその話を聞き、銀のライオンが次の王様にふさわしいのではないかと思つたほどでした。
ところが、金のたてがみをしたライオンが出てきて、自ら王様になりたいと言つたのです。金のライオンは、他の動物達を見下しているところが、とつてい王の資質を持つた者ではありません。しかし、どうしても王様になりたいという思いが強く、銀のライオンの良さを自分の目で確かめておきながら、根も葉もない銀のライオンのうそやうわさを流してしまふのです。

私は、始めは金のライオンがこんなことをしても、誰も信じるわけがないだらうと思つていました。ところがどうでしょう。私と同じように始めは信じなかつた動物達が、毎日、銀のライオンの悪いうわさを耳にすることで、そのうわさは本当かのように国中に広まつていくのです。私は、その様子にドキドキしてしまいました。
なぜ、みんなは、人から聞いた話をすぐに信じてしまふのでしょうか。本当は良い行いをしていて銀のライオンなのに、なぜみんなに疑われ、責められなければならないのでしょうか。良い行いをしていて銀のライオンだけが傷つけられています。私は、それがくやしくて、金のライオンを憎らしく思いました。金のライオンは、うそをついてまで、王になりたいのでしょうか。
しかし、銀のライオンは、ただだまつて苦笑しているだけでした。それは、いつかは誤解が解けると信じていたからです。私なら、それは違うと否定します。しかし、銀のライオンは、しませんでした。私には、それがとても理解しがたく思えてなりませんでした。

そして、結果、金のライオンがこの国の王様になつてしまふのです。しかも、この王は国民のことなど考えず、やりたい放題生活し、やがて国は荒れ果ててしまふのでした。国中のみんなは、どれほど後悔したことでしょう。私もくやしなくてやしくて、しかたがありませんでした。国中の誰もが、なぜこんなことになつてしまったのかと、なげきましました。
一部始終見ていた真つ白い雲は、こう言いました。
「うそは、向こうから巧妙にやつてくるが、真実は、自らがし求めなければならぬ。」と。
考えてみれば、金のライオンの他には、誰一人悪意のある者などいませんでした。しかし、誰一人として、自分の目で何か一つでも確かめようとする者もいませんでした。
雲は、こうも言っています。
「誰かにとつて都合の良いうそが、世界を変えてしまふことさえある。だからこそ、何度でも確かめよう。」と。
私は、ふくろうや小鳥だけではなく、他の者達も、「銀のライオンは、そんなこととはしない。」
「それは、全くのうそだ。う

そかどうかは、自分の目で確かめてみよう。」
と云つていたら、この国は変わつていたと思ひました。
ふり返つてみると、私自身、この本を読むまでは、うわさに簡単に流される人間でした。しかし、この本に出会い、気付いたのです。物事は、自分が納得し信じていることができるまで、何度でも確かめなければならぬということ。これからは、
(変、たな。)
(おかしいな。)
と思つたことは、必ず確かめ、事実だけを信じます。それに、人に迷惑をかけてしまふようなうそは、絶対に言いません。うそは、人々によつて、たちまち世の中に広まり、私達が住んでいる国や人々、生活、自然、生き方等多くのものをうばつてしまふからです。
二番目の悪者。それは、うわさばかりに流されて、真実を見ようとしないうそ者のことだと気付きました。

書名：二番目の悪者
著者名：林木林
出版社名：小さい書房